The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞ S.N.Eisenstadt & L.Roniger, ”Patrons, Clients and Friends”, Cambridge University Press, 1984
Author(s)	相沢, 哲
Citation	年報人間科学. 1992, 13, p. 184-188
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11365
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

◇書　評◇

S. N. Eisenstadt & L. Roniger

Patrons, Clients and Friends

Cambridge University Press, 1984

相沢　哲

本書は様々な interpersonal 関係（友人関係、種々の儀礼的関係ー血盟による義兄弟、名付け親等々、パトロンークライエント関係など）とそれらを生み出す社会的条件の比較研究（アイゼンシュタットの近年の諸著作と同じく、ヘブライ大学社会学部の「比較文明」研究のフレームワークに沿ったもの）である。かなり大部な著作であるので、以下では議論の本筋に的を絞った要約と解説を試みる。

著者によれば、これらの人間関係は、純粋な信頼と精神的価値の領域を構築しようとする試みの発現である。本書における人間関係の比較分析の中心的問題は、社会秩序の中の信頼と「意味」の制度化、それらの制度化に伴う矛盾・緊張の動態である。信頼の構築は、制度的秩序の編成の基本的次元であると同時に、常にその制度的秩序を越えようとする試みとしても現れる。

著者の分析的視点は、まず社会学史に沿う形で明かにされる。古典社会学の時代より、社会秩序の編成、維持を説明するため次の四つの次元が着目されてきた。①分業、特に市場の組織化（アダム・スミス以来）②権力の制御（主にマルクス、ウェーバーによる）③信頼・連帯の構築（テンニース、デュルケム）④行為の意味と正当性の付与（ウェーバー、デュルケム）。これら四つの次元がパーソンズによりＡＧＩＬ図式（分業・権力・信頼・意味⇔経済・政治・統合・文化および動機づけ）として定式化・体系化され、機能主義社会学は四つの次元が社会構造に「織り込まれる」制度的プロセスを特定化することに成功した。ただし本書において着目されるのは、むしろパーソンズ等がうまく処理できなかった諸次元間の不整合、

緊張の動態（例えば、日本はじめ多くの非西欧諸国に見られる、経済発展、政治機構の近代化と、文化・象徴体系の領域におけるリアクショナリィな方向への変化が相即的に現れる事例のような、上述の諸領域における変化の方向性とテンポのずれ等。この問題は、パトロンークライエント関係の研究に関して特に重要な位置を占める）である。

さて、全ての社会のそれぞれの制度形成において、信頼・意味と手段的・権力的関係とは様々な様式で織り混ぜられる。この織り混ぜは、専門的に分化した領域より、属性的・連帯的集合体（親族、コミュニティ、階層、民族、またパトロンークライエントのネットワーク等）において非常に緊密になる。こうした無条件的関係を伴う集団における資源の流れを組織立てる方法を、著者はモースに従って「一般交換」（専門化された制度的市場において、主として利害関心から為される「特殊交換」と対照を為す）と措定する。ここで留意せねばならないのは、この一般交換／特殊交換の識別は、レヴィ＝ストロースの一般交換／限定交換の分類とは異なるものだ、ということである。著者の言う一般交換は、レヴィ＝ストロースにより、財が一方的に移転しながら交換のリンクが循環して閉じることにより互酬性が達成される交換のシステムに与えられた名称ではなく、モースにより「一般化された」交換であり、信頼の確立、デュルケム言うところの「社会生活の前契約的要素」の維持の働きをする、「全体的社会事実」としての交換全般である。

一般交換により、制度的秩序における信頼は確立される。しかし、まさにそれが制度であるゆえ、純粋な信頼・連帯、親密さ、崇高にして素朴な価値への参与、平等性などを求める試みは、その外へあふれ出る。例えば一般交換の制度化は、全ての社会において「エリート」の競合あるいは共働によって、交換の原則の特定、公共財と資格の設立等を通して遂行される。つまりエリートの連合のコントロールを通して、信頼の構築、意味の供給、権力の規制と分業の編成は結び付けられる。かくして一般交換の制度化は必然的に権力とヒエラルキーの強い要素を含む（全成員が平等で、水平的互酬のみを行っている社会など存在しない）。この混淆のため、純粋であるべき信頼・連帯の次元は権力的・手段的関係により「汚染」される。この一般交換の特定化を通しての信頼の制度化が必然的に伴う緊張から、純粋な信頼の領域の回復を求める、新しいアタッチメントの形成への傾向が発展する。友人関係、種々の儀礼的人間関係、制度の間隙に現れるパトロンークライエント関係の形成は、家族・親族の領域の外に、さらに制度的枠組を超えて純粋な信頼の領域を構築しようとする試みなのである。

以上のような理論的視軸から具体的な比較分析ー様々な個人間関係の類型と、それらが発現する社会の制度的マトリックス、特にその制度的統合の核心である一般交換の様式との関連の検討が為される。

まずパトロンークライエント関係（煩わしいので以下ＰＣＲと略記する）が、多様な地域・時代に及ぶ膨大な事例を挙げて詳細に検討される。従来のＰＣＲの比較研究、類型論のほとんどはその具体

的組織的側面（ダイアディック、トリアディック、より広いブローカーのネットワーク等々）から分類を試みてきた。しかし実際にはそうしたPCRの具体的形態は、同じ社会の同じ領域においてもしばしば短期間に変化するのである。

これに対して著者は、先述の一般交換を鍵概念にして類型化を試みる。その際最も重要かつ本質的な区分は、当該社会の制度的統合の核心を構成している、一般交換の様式としてのPCR（筆者はこれを「他に適当な言葉がないので」一般交換のクライエンテリスティック・モデルと名付ける）と、中心的制度的関係の間隙に生じる「付加物」（addendum）としてのPCR（つまり、当該社会の一般交換がクライエンテリスティック・モデル以外の様式で構造化されている場合）との識別である。例を挙げれば、イタリア南部、スペイン他の地中海沿岸諸国、ラテン・アメリカ、東南アジアの多くの諸社会においては、一般交換のクライエンテリスティックな様式による構造化が支配的であり、一方アメリカ、ロシア、インド、中国等におけるPCRは、制度の隙間に存在する「付加物」（それは一般交換の限られた部分を構成することが社会的に承認されている場合と、正統化されぬ非公式なものである場合とがある）でしかない。

なお、クライエンテリスティック・モデル以外の一般交換の主要な様式には次のようなものがある。自治共同体的親族モデル（「未開」社会、「部族」社会において見られる）、属性によるヒエラルキー・モデル（インドのカースト制度や歴史上の封建的諸社会）、普遍主義的モデル（これはさらに、今日の西欧・北米諸国において支配的な開放的多元主義的モデル、歴史上のいくつかの「帝国」や全体主義的国家において見られる全体主義的モデル、ヨーロッパの小国に多い多極共存的モデルに細分される）。これらのモデルと比較してクライエンテリスティック・モデルの諸特徴（例えばその存在は、潜在的に自由な資源の流れ、広い市場、それらへのアクセスに関する潜在的に普遍主義的な前提と、それらを制限しようとするエリートの継続的なコントロールの試みとに基づいていること、など）が明かにされ、さらに、一般交換の、属性によるヒエラルキー・モデルの付加物としてのPCR（事例としてインド、ルワンダ、近代化以前の日本など）と、普遍主義的モデルの付加物としてのPCR（アメリカ、ソ連、イスラエル等）の諸特徴が議論される（例えば普遍主義的モデルが優越的な社会においては、当然PCRは正統化されず、PCRに対する強い社会的対抗力が働くこと、など）。

次いで、上述の一般交換のクライエンテリスティック・モデルを生み出す社会的諸条件が探求される。この問題は、従来の研究においてはしばしば経済発展および政治の近代化の停滞により説明されてきた。だが実際は、クライエンテリスティックな諸社会（地中海沿岸、中南米、東南アジアの諸国）において一般交換のクリエンテリスティック・モデル自体は、地方のより広域な市場への編入、経済の成長、政治機構の近代化等々にも関わらず、その組織的形態を変えつつ存続する。

著者は、クライエンテリスティック・モデルを生み出し、また維

持・存続させる条件を、先に挙げた制度的秩序の構成要素（信頼・意味・権力・分業）とそれらの「織り混ぜ」を担うエリートの構造、彼等のコントロールなどにおける特徴に見出そうとする。それらの特性のうち、最も重要なのは、以下のようなものだろう。経済における「粗放的」・搾取的性格、エリート層も下層も含む主要な社会的セクターの自律性・集団意識の弱さ、主要な属性的集団内の信頼の弱さ、公的制度への信頼の弱さ、等。これらの諸条件が同じ階層・同じ社会的カテゴリーに属するメンバー間の資源をめぐる争い（つまり、例えば様々な資源を獲得すべく下層階級が団結してエリート層に闘争を挑むのではなく、下層階級内・エリート間に闘争が生じ、両者の間にPCRが形成される）という事態に帰結するのである。

さらに著者は、先に挙げたPCRの組織的ヴァリエーション、パトロン及びクライエントの役割取得の形態や交換の内実のヴァリエーションをも整理し、それらの体系的分析を試みる。子細は省かざるを得ないが、これらのヴァリエーションを説明するのに用いられるべき主要な変数の一つが、先に出てきた政治・経済の領域における近代化の水準なのである。かくして著者は従来のPCR研究の弱点を克服する。

以上のような、PCRに関する包括的・網羅的な議論に比して、その他の儀礼的人間関係、友人関係などについての議論は、先行研究の少なさもあって予備的・試験的なものにとどまっている。ともあれ、その中心的な問題はここでも、様々な人間関係を通しての信頼の領域の構築の試み及びそれに内在する緊張の表出と、社会秩序の中の信頼の制度化との間の密接な、しかも弁証法的な関係の分析である。

個人間関係を通して信頼の領域を築く試みは、必然的に次のような緊張を伴う。①純粋な連帯、精神的価値の強調と、関係に伴う互酬的交換のような具体的義務との間の緊張②そうした関係を安定化すべく、新たに自己制度化しようとする動きと、制度からの離脱への傾向との間の緊張③社会秩序の基底にある素朴な価値を維持しようとする傾向と、制度的秩序への敵対的志向との間の緊張。これらのアンビヴァレンスの現れ方は、当然社会の諸々の条件によって異なる。例えば構造的分化の水準の低い社会（「部族」社会など）では、親族の領域を超えた連帯的関係の形成の試みは、結局それ自体、儀礼的に規定された制度へと形式化する。一方、より社会構造が分化した社会では、こうした関係は非制度化、私的領域化する（個人間関係の制度化の度合いと、その社会におけるプライヴァシーの領域の承認とは反比例する）。それは制度的領域で生み出された緊張を緩和することにより、間接的に制度的秩序を支える機能を果たす場合もあれば（旧来の「第一次集団」「インフォーマル集団」の機能はこのように考えられることが多かった）、そうした関係・集団が、制度的秩序に対する敵対的な、V・ターナーの表現を借りればliminal な傾向、さらにはオルタナティヴな社会秩序への志向を持つ場合もある。

そうした個人間関係の制度的秩序への敵対的傾向の強度は、個人

間関係の形態のヴァリエーション一般を生み出す諸要因と同じ次元、即ちその社会の一般交換の構造化の様式、資源のフローをコントロールするエリートの連合の構成と、そうしたエリートに担われる主要な文化的志向、様々な制度的領域のシンボリックな分化の程度と各領域に適用される原則に関わる問題等々に条件づけられる。例を挙げれば、信頼が一般交換の全体主義的モデルに従って制度化されているほど、敵対的傾向はシンボリックに明確になり、かつ良く組織されたものとなる。対照的に、社会的中心が弱くエリートが属性的ユニットに埋め込まれている場合や、信頼が一般交換のクライエンテリスティック・モデルに従って制度化される傾向がある場合には、そうした敵対的傾向はあまり明確にならず、様々な制度的領域に拡散してゆく。

全体の結論は次のようなものである。全ての社会において、新しい人間関係を形成し、制度的秩序を超えることによる、さらにはその変革を目指すことによる、信頼の領域の構築の試みは、信頼の制度化を形づくる力に大きく影響され、その具体的な形態は、継続的に変化するその力に従って様々なヴァリエーションを示す。しかし制度的秩序の超越を、あるいはそこからの離脱を求める試みは、また新たに制度的秩序の一構成要素となり、信頼の領域を築く試みは形を変えて社会に存在し続ける。つまり、人間関係の形成による純粋な連帯の追求は、決して十全に成功することが無いゆえ、全ての社会において発展し、存在し続ける。これは――と、著者は締めくくる――人間の根源的条件に内在する窮屈さのしるしなのである。

以上のように本書は、様々な個人間関係の類型を、一貫したパースペクティヴから体系的に分析した極めて野心的な研究であり、少なくともPCRに関しては現在の研究水準の頂点にあるものの一つと言って間違いない。

特に興味深いのは、信頼と社会秩序の弁証法、即ち信頼の構築が社会の安定要因であると同時に動因であるという視点が、結果的に「第一次集団」「インフォーマル集団」の再解釈を促している点である。これは、今日のエスニシティに関する議論や、集団・組織論、特に資源動員論の中核的問題の一つに別の角度から、あるいはより深い場所から光を投げかけているように思われる。

ちなみに評者自身は、自民党政権の長期存続を可能にした諸条件、特にその地域における支持獲得のメカニズムを、日本の特殊性に解消することなく、「普遍語」で記述・解明したいという問題意識から、PCRに関心を持つに至ったのだが、とりわけ近代的要素と「土着」の要素との相互作用、および権力と「私的」な人間関係との混淆への着目において、本書の議論から学ぶところ大であった。

評者としては、特に近代化論、権力論に関心を持たれている方に本書の一読をお勧めして、結びの言葉としたい。